

「円環ではなく螺旋」

この説教を考えている時、なんとなく今日の大晦日に絡めて話題を広げられないかと思って、色々調べてみました。「大晦日」とは、1年の最終日のことを表す言葉ですが、「大きい」という字を取って「晦日」と言うと、これは毎月の最終日を表す言葉になります。言葉の成り立ちの順番としては、毎月最終日を「晦日」と言い始めて、その上で、最も大きな月である12月の最終日、1年の最後の日を「大晦日」と言って特別な感じを込めたわけですね。また、「みそか」という読み方は、もともと「30日」を表すものでした。「ついたち」「ふつか」「みっか」「よっか」「いつか」と日付を読んでいって、「20日」を「はつか」と言い、「30日」を「みそか」と呼びました。「みそか」と言うと、あまり聞きなれませんが、30歳のことを「三十路（みそじ）」と言うのと、読み方の仕組みとしては一緒ですよ。そして、興味深いのは、この「晦日」には、別の読み方があります。「つごもり」と言いまして、「大晦日」のことを「おおつごもり」と言ったりもします。大晦日の前日である12月30日は、「小さな晦日」と書いて「しょうみそか」と言いたいところ、これは何故か「こつごもり」という読み方しかしないようです。「つごもり」も「こつごもり」も、パソコンの漢字変換にも出てこないのも、間違いなく難読言葉だと言えます。この「つごもり」の語源を遡ると、「月が籠る」から来ているようで、月が夜空に籠ってしまって見えない新月の日と関りがあります。日本の旧暦では、毎月の最後の日が新月であるとされていて、「月が隠れて見えない日」＝「月の最終日」となり、「つごもり」は30日を意味する「みそか」と重なりました。ちなみに、面白いと思ったのは、日本の旧暦ではお月様がお籠りをする新月の日は、月の最終日となっていますが、ユダヤ教の旧暦では、新月の日から新しい月が始まりました。日本の旧暦も、ユダヤ教

の旧暦も、どちらも月の満ち欠けを基準とし太陽の動きも計算に入れて日数を数える「太陰太陽暦」と呼ばれる暦を用いています。でも、日本では、新月は月の終わりで、ユダヤでは新月は月の始まり、と考えられてきたのは興味深い違いだと思います。多分、全然関係ないと思いますが、ユダヤ教から続くキリスト教において、クリスマスが12月25日とされている背景には、その頃が冬至に当たり、最も昼間の時間が短い、ということが挙げられます。つまり、世界の救い主であるイエス・キリストは、世界が最も長い夜を過ごしている最も暗い時にお生まれになり、そして、そのクリスマスの日から、世界は少しずつ昼間の時間が長くなって、明るくなっていく、という、そういう期待が込められているわけですね。このキリスト教におけるクリスマスの時期設定についても、ユダヤ教の暦の考え方についても、日が短い、月が見えないという暗い場面にこそ、物事の始まりがあるんだ、という、そんな共通理解がありそうな気がします。「真っ暗になった、だから、もう終わり」ではなくて、「真っ暗になった、だから、これから始まるんだ」というような。

考えてみますと、ユダヤ教やキリスト教の宗教観には、「終わり」ということが、あまり出てきません。神様は全てのことを始められたけれど、その「終わり」については、ほとんど一つの答えしかありません。それは、「終末」と呼ばれる、世界が完成される日のことです。この「世界が完成される日」が来るまで、この世界には「終わり」というものはありません。人の命も、寿命を迎えて、一度、この地上を離れはしますが、終末の日には、生ける者の死ねる者も、等しく主の御前に立つこととなります。人の為す全ての行いについても、神様の導き中では、「終末」に向けた過程・経過の積み重ねです。たとえ人の目には「終わり」が見えたとしても、それは新しい御業の開始地点であり、「もう終わった」という落胆や無念は、次の御計画の下敷きとして用いられ、そこから再び事が始まっていきます。基本的に、キリスト教においては、本当の終末がやってくるまで、「終わり」はありません。

この「終わり」というものの捉え方に関わってくるのですが、今日の聖書箇所の後8節において、主なる神様は、「アルファであり、オメガである」と言われています。これは、ちょっとややこしいですが、「神様は、1から10まで、しっかり導いて行かれる方である」ということです。ギリシャ語のアルファベットにおいて、アルファは最初の文字であり、オメガは最後の文字です。神様は、この最初と最後の文字を自らに当てはめることで、御自身が、この世界における最初から最後に至るまで完璧に支配し、導かれる方であることを言おうとされています。また、ギリシャ語のアルファベットも、英語のアルファベットも、ヘブライ語のアルファベットも、そして、日本語の50音も、「あ」から始まったら、途中で繰り返すことがないように、神様の導かれる歴史にも、繰り返しはありません。私たちが神様と歩んできた歴史も、アルファから始まって、最後のオメガ、終末に至るまで、繰り返したり、止まったり、あるいは、飛んだりしない、ということです。

頭の良い人ほど、過去の出来事を深く調べて、その上で、現在の在り方を分析し、「やっぱり、歴史は繰り返す」と言いがちな気がします。確かに、戦争が無くならず、政治家の抱える問題も似たようなことが続き、周期的にやってくる流行り廃れを見ていると、我々はちゃんと歴史から学んでいるのか、と言いたくなる気持ちもあります。やっぱり、人は変われど、歴史は繰り返しているんじゃないか、と。でも、少なくともキリスト教的な物の見方をするなら、歴史は繰り返してはいません。神様の導かれる歴史は、常にオメガに向けて、進み続けており、途中で折り返したりしない。私たちは、同じような出来事に晒されて、過去にも感じたような悲しさや空しさを再び味わうこともあるかも知れません。戦争や犯罪や災害のニュースを見るたびに、「何故、同じ悲劇を繰り返すのか」と思うことも、きっとあるでしょう。でも、それは「繰り返し」ではありません。悲しい部分だけ、空しい部分だけを切り取って受け止めるなら、それは、過去に起こった悲劇と似ているかも知れませんが、でも、その悲劇を取り巻く環境や状況は、必ず進歩しています。人の思いや考え

は、経験を重ねて、少しずつ変わってきています。人の為す全ての行いは、神様の導き中で「終末」に向けた働き・経験の積み重ねなのです。もちろん正確で正義に満ちた働きばかりではないでしょう。間違えたり、失敗したりした経験もあるでしょう。人は、完璧には振る舞えないから、同じような過失を重ねて、全く進歩が無いように感じられるかも知れません。でも、すべては積み重ねです。歪な形だとしても、それを一つ一つ積み重ねて、私たちは未来に向かって生きています。間違いを犯しながら、ごめんなさいって言いながら、自らの行いを積み重ねています。その営みは、決して繰り返しではありません。どんな形であれ自らの行いを積み重ねたなら、そこから新しい景色が広がります。ちょっとだけですが、自らの行いを積み重ねる前の自分と、積み重ねた後の自分とは違っているはずですよ。だから、同じことが繰り返されることはありません。

今回の説教題にした言葉は、私の好きな言葉です。「円環ではなく螺旋」。これは、私たちの人生も歴史も、「円環」ではありませんよ、ということです。円環と言うのは、完全な円、丸ってことです。その形にそって進んでいくと、グルグル巡って、同じ場所を繰り返し通り過ぎて、出口のない堂々巡りと言った感じです。でも、私たちの人生も歴史も「螺旋」なんだと思います。螺旋にそった歩みは、上から見ると、ほとんどの円環にそった歩みと一緒にですが、螺旋を進んでいくと、少しずつ高さが変わっていきます。螺旋階段を上るように、あるいは降りるように、グルグルと巡っていくと、すると、同じような景色を何回も見せられているようで、しかし、その見えている景色は、ちょっとずつ変わっていきます。高く上れば、その分、遠くが見えるようになり、低く降りれば小さな形も見分けられるようになります。私たちは、円環ではなく、螺旋の人生を生きている、歴史を歩んでいる、そう考えてみると、ちょっとワクワク、期待することもできるんじゃないかと思います。明日から始まる新しい1年は、今年とも違い、過去のいずれの年とも異なる、全く新しい景色が広がる1年だということです。まあ、劇的な変化があるとまでは言えませんが、「どうせ

来年も代わり映えしない」とため息をつくのは、早合点だと思います。期待して行きましょう。神様が、どんな景色を見せてくださるのか。私たちが共に、どんな景色を創り出していくのか。

最後になりましたが、今回の聖書箇所をとった、ヨハネの黙示録とは、今から 2000 年前に生きたヨハネという人が、当時の世界観と宗教観と、知恵と知識を総動員して語り残した「未来予想図」です。2000 年前に書かれた「未来予想図」なわけですから、実際に未来を生きる私たちが読むと理解不能だったり、荒唐無稽だったりします。それが、このヨハネの黙示録を読むことを難しくしている理由でもあります。でも、すごいと思いませんか、このヨハネさんは、自分の目の前に広がる現実とは、将来こう変わって行くんだ、と信じて、まだ見ぬ未来の様子を大胆にヨハネの黙示録として書き残したのです。また折を見て、詳しくヨハネの黙示録も語ろうと思いますが、このヨハネの黙示録には、当時のキリスト教を虐げていたローマ帝国が滅ぼされる未来を、多くの幻想的な言葉を用いて語っています。この「幻想的な言葉」というのが、今を生きる私たちには非常にやっかいで分かりづらいものなのですが、でも、当時の信仰者にとっては、期待と希望にあふれた「励まされる言葉」だったという事を忘れないでいたいと思います。そして、キリスト教迫害という絶望的状况の中で、まだ見ぬ未来を思い描いたヨハネさんの、その信仰を見習いたいと思います。今はつらい、今は救いようがない、けれど、神様はきっと明るい未来を備えてくださっているに違いない、と信じて、臆せず未来を語った、このヨハネという人。私たちも、繰り返すことなく、着実に進展していく、この神様の世界を信頼して、未来に期待しつつ、歩んで参りたいと思います。とりあえず、明日から始まる 2024 年を心から喜びたいと思います。きっと良い年になります。今までとは違う新しい恵みが与えられる 1 年になります。そう信じて、心を高く上げて新年の一步をご一緒に踏み出して参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も、私たちのこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたの導かれる歴史の中で、今年もあなたの愛と恵みとを沢山頂きながら、私たちは信仰の歩みを続けて参りました。日々、私たちが顧みて、時宜に適った御業を示してくださり、心から感謝致します。明日から、新しい1年が始まります。どうか、神様、新しい1年に踏み出す私たち一人ひとりを祝福で満たし、喜びと希望を新たにして、あなたへの賛美と感謝の祈りと共に、日々を過ごすことができますように、守り導いてください。少しずつ、少しずつ、世界に平和が広がり、私たちの心にも人を慮り、愛する思いが増し加えられますように。どうか、あなたが世界を支え、私たちに励ましてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

1月召天者を憶える祈り

聖書：ヨハネによる福音書 14章 1～4節

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

笹本きく ささもと きく 姉 (2011年1月7日召天)

児玉栄美子 こだま えみこ 姉 (2013年1月7日召天)

中溝嘉伊蔵 なかみぞ かいぞう 兄 (1962年1月11日召天)

田代良枝 たしろ よしえ 姉 (1990年1月13日召天)

柴田卓三 しばた たくぞう 兄 (1931年1月15日召天)

口野はる代 くちの はるよ 姉 (1971年1月20日召天)

中村裕典 なかむら やすのり 兄 (2021年1月24日召天)

橋本靖子 はしもと やすこ 姉 (2017年1月29日召天)

野尻まつお のじり まつお 姉 (1931年1月30日召天)

大竹雅子 おおたけ まさこ 姉 (2015年1月30日召天)

福井まきの ふくい まきの 姉 (1998年1月31日召天)

神様。私たちは今、敬愛すべき信仰の先達を憶えて祈りを合わせています。新年と到来を喜ぶ1月に、あなたの御許へと召された方々は、この地上にある間、祈り、働き、慰め、感謝し、あなたの語られた御言葉を聴いて、隣人を愛するという尊い業に励んで来られました。どうか、そのことをあなたが御心に留めて、相応しい祝福と恵みを注いでください。地上における労苦は、必ず天の国において報われるという真実を、どうか豊かに示してください。また、未だ、この地上にあって、あなたから頂いた、それぞれの業に励む私たちを顧みて、励ましと癒しをお与えください。天上の友に恥じることのない、信仰の歩みをこれからも為すことができますように。御支え、お導きください。天の上には永久の平安がありますように。地の上には豊かな慰めと励ましがありますように。祈り求めます。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。